
R-TYPE Rの系譜

ケフィア

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R - TYPE Rの系譜

【Nコード】

N6294X

【作者名】

ケフィア

【あらすじ】

R - TYPE……小さい頃、やり込んでやったシューティングゲームを小説化しました！！

目標ではFINALまでのバйдミッション、つまりは？、？、？……そして？を書いていこうと思います。

名前はねつ造、つまりはオリ主です。頑張ってみますが、設定が複雑なので間違えている部分があります、その場合は指摘をしていた

だけると感謝です。

残酷な描写がありますのでご容赦を……。

感想の制限を取りました、気軽に感想を書いてください。

プロローグ バイドとは……（前書き）

会ってるわからない、プロローグ。

間違ってたらごめんなさい！

この小説はR・TYPE TACTICSの設定も流用しています
！！

プロローグ バイドとは……

○とある人物のメモ

バイドとは、

人類が生み出した悪夢。

覚めることのない悪夢。

……バイドとは……

それは26世紀の人類が生み出した、惑星級の星系内生態系破壊用兵器——バイド、正式名称は『BYDO』。

外宇宙生命体との接触に備えて建造されたそれは、反応兵器や次元兵器と異なり空間を汚染することなく、その効果範囲における全ての生態系を破壊する局地限定兵器であった。

すべてを侵蝕し、取り込み、進化して、自分以外の生命体すべてを喰い尽くすまで活動続ける人の手による絶対生物、それは生体物理学、遺伝子工学、魔道力学までも応用して合成した兵器……になり筈だった。

あるうことか、バイドは作り上げた人類に反旗を翻した……それは、ほんの些細なミスによって”それ”は太陽系で発動した。

150時間荒れ狂った”それ”は次元消去タイプの兵器によって異次元の彼方へ吹き飛ばされ、

一応の決着を見たのである。26世紀では。

——だが、”それ”は生きていた。

異次元の中で進化を続けながら胎動を繰り返す肉塊。生体物理学、遺伝子工学、魔道力学の、その総てを注ぎ込み、作り上げた『悪魔』は異次元の中でも生き延びた。

そして気の遠くなるような彷徨の果て、時間を超え、その力の発現した先には22世紀の地球があった、運命の悪戯だろうか……それとも必然か、バイドは自分たちを作り上げた本人の元に帰って来た、過去の人類の元に。

A・D・2120 2102に超長距離航行をしていた異層次元艇
フォアランナが、超束積高エネルギー生命体——『バイドの切れ端』を採取し帰還する。最初は超エネルギーとして、期待された『ソレ』は培養され、研究された。ありえないエネルギー値、見たことない物質……心が躍らない研究者はいなかった、後に『狂気の研究者たち』『キボウ』とまで言われる集団——Team R
——チーム・アールタイプTYPE、後に最高最凶の兵器を作り上げる集団の誕生であった。
『狂気の切れ端』同時期に地球からフォアランナ探索地点で、未知の生命体が観測された、生命体群は膨張と増殖を繰り返していた。それを知った人類は喜んだ、宇宙にも人類以外の生命体が居るのか……と、これが悲劇の引き金である。探査艇フォアランナは生命の欠片らしきものを回収してきた。しかし回収してきた『ソレ』は前に回収した、『バイドの切れ端』に酷似していた、違ったのは非常に強い排他的攻撃性をもつ生命体であることが判明したこと、それと乗組員の言葉だった。

「悪魔だ……あれは悪魔だ!!」

それからバイドの群れは脅威的なスピードで増殖移動を繰り返し、見つかつて四十年後に太陽系があるオリオン腕に進入した。まさに悪魔、人類には悪魔にしか見えなかった。だから悪魔（BYDO）と命名された。

しかし人類も負けてはいなかった、すぐさま新兵器の開発に着手した。対バイドミッション発令。対バイド兵器は選考の結果……当時、宇宙空間機動計画という計画の汎用作業機、『Rシリーズ』が採用された。採用された大きな理由は……高い汎用性を認められたからだ。

2125 超束積高エネルギー生命体兵器化計画立案。木星の研究施設で開発が進められる事になった、つまり、バイドの研究だった。しかし……この研究所は九年後、消失した。

2134 木星ラボからの通信が途絶える。探査艇「スカイホープ」が調査の結果……直径6mの高エネルギー体『バイドの切れ端』を中心に、ラボを含む空間が半径3万mにわたり消失しているのを発見、ここで間違えないでほしいのは消滅ではなく『消失』つまり消え失せたのだ。そして探査艇がエネルギー体を採取し帰還する。これにより地球で対バイド用決戦兵器が完成する、対バイド用バイド兵器『フォース』、これは純粋なバイド体……エネルギー体のバイドに、コントロールロッドと呼ばれる制御装置を直接つけ、無理やり制御した……隠しようもない『バイド』だった、後にフォースによる悲劇が起きるのだが……。もう一つは人造フォース『ビット』、R戦闘機の補助砲台としての役割を担う物であった。

2143 有人機R-7、これはTeam R-TYPEの、最高

の技術力をもつて開発された、異層次元航行能力、つまり単独での異次元ワープ機能、波動砲、ここで言うておくが波動砲に銃身はいらない。この機体には問題があった、普通の戦闘機の百倍の値段、そして戦闘機の四倍の速さ……しかし、ここで言うておこう、この程度ではフォースに似合う速さではなかった。その問題点が解決されずに、テストパイロットのミコヤン・グレゴビッチ大佐が搭乗にフォースの実用化試験を行い……失敗。理由はフォースを後方に装備し波動砲を使用した所、力場安定用レギュレーターが異常加熱。エネルギーの蓄積座標が後方に引っぱられ閃光とともにR-7は蒸発してしまった。エンジンがE-UNITだったために回避するのには出力不足だったのである。それでも核爆発並の威力はあった……しかし、フォースは無傷で回収された、傷一つなかった。この結果からTeam R-TYPEは慣性システム『ザイオング慣性制御』を開発、これにより従来ではありえないスピード、慣性制御……簡単に言えばGを全く感じない、機動が垂直縦移動、横移動など……従来の戦闘機ではありえない機動力を得た。

2162 低出力波動砲装備高機動巡回機「プロトタイプR-9」
ロールアウト……これ一機でも、戦艦一隻分の戦力を持っていた。
しかし……この機体の技術のほとんどが、バイドによってもたらされたオーバーテクノロジーによるものである。

2163 ザイオング慣性制御で艦装、高出力波動砲（スタンダード波動砲）を装備した、武装強化した「R-9」ロールアウト。『波動砲』は戦闘艦に搭載される主砲並の威力を持つ、超強力な残滅兵器。

そして…… R - 9 大隊により地球初の異層次元戦闘が行われる。後に第一次バイドミッションと呼ばれる大規模戦闘、いや戦争である。

そんな時期、一機の R - 9 に乗るエン・ライザスとリナ・アークナイト……この二人、後に英雄とまで言われた者の物語が始まった。

プロローグ バイドとは……（後書き）

作「次回予告!!」

侵攻するバイド、人類の存亡をかけて飛び立つ『始まりの矢』たちは異相次元を目指して、バイドに汚染されたスペースコロニーに乗り込む、そこにいたものは……

次回『始まりの矢、A級バイド』

作「それではちえりお!!」

始まりの矢、A級バイド（前書き）

今回、少し設定を弄りました……うーん、妄想爆発な設定なので、変に感じたら言ってください。
それでは！！

始まりの矢、A級バイド

宇宙空間、本来は静かなこの場所も……今は戦場と化していた。

「何してる！ 三十分後には出撃だ、『R-9』大隊は準備完了か？！」

「やってますよ！！ それよりリアルゲールの装填はチェック済みですか？！！」

「二時間前に終わってるよ！！ 今は波動砲とフォースのチェックだ」

慌ただしく、整備班が叫びながら三十機以上のR戦闘機が並んでいる……しかし、その中でも目立つ機体があった、グレーのR-9Aだ……他のは白いのに、一機だけ違う。

「プロトタイプまで出すなんて」

「バカ言うな、その機体な……正直に言うと通常のRよりも機動性、波動砲が強化されてるんだよ」

そうプロトタイプである、先行的に開発されたが……あまりの性能に少し出力を落としたのが通常のRである。一応はこのときはまだ人間に『優しい』設計をしていたR戦闘機、後の機体は……いや、ここでは言う事ではない。言えることと言えば……ルピコン川を渡った彼らは悪魔を作り上げた、それだけだ。

「……にしても、こんなピーキーな機体に誰が乗るんですか？」
「確か——」

「俺たちの事か？」

そこに現れたのは中世的なそれでいて凜々しい顔つきをした男と、無表情な金髪の女だった。彼はR大隊所属、エン・ライザス少佐とリナ・アークナイト大尉だった。二人とも成績優秀、わずか二十代前半でこの階級であり、期待の新人である。

「……私たちの機体はこれ？」

「はっ！ その通りです、しかしピーキーな性能ですよ？ 通常型の方が——」

「だが、このRは波動砲を2ループチャージができる……バイドには脅威だろ？」

本来、R-9Aの波動砲は2ループチャージ……簡単に言えば、二段階溜め攻撃であるが急造のため、1ループしかできない。しかし試作型であったプロトタイプは何とか実装でき、テストもしてある。

「少佐……確かにバイドには有効的です、しかし機体への負荷軽減がまったくできないのですよ?!」

「……大丈夫、そんなに多用しない」

「1ループでも十分な威力さ、俺たちが使つとすれば……A級バイドだ」

バイドは各個体の破壊能力や破壊衝動を換算し、バイド係数として数値化されており、E-9Aの五段階のバイドクラスに分類される。特に注意すべきはA級バイドである、これらのクラスは一個艦隊相当の戦力が無いと倒せない。

「A級バイドですか？」

「ああ、ミッドナイドアイ……R-9Eの報告ではいたんだろ？」

「はい……それも二体のバイドが共生、いえ詳しい事はわからないのですが、なにぶんバイドに変容した生物はまったくわからないのです」

「……たしかそのとき、先行した一個小隊の『R』が全滅したそうですね」

「……はい、まさかA級バイドがあそこまで強いとは。あれが居なければ戦艦ごと異相次元前まで突撃できるのですが」

そう人類はすでに背水の陣、先行的に量産されたR - 9 A 一個小隊が残滅に向かったが……全滅が確認された。

「……よし、そろそろ時間だな」

「うん……その前にキスして」

とお暑い雰囲気だが、この二人は恋人同士だ……それにR - 9 AはタンDEM、つまりは二人乗り慣性、フォース制御が後ろの席の役割、攻撃は前の席の役割と、このように二人で作業するので効率がいい。後のR戦闘機は一人乗りが主流になるが……

「（……さあ作業に戻るぞ！）」

「（は、班長！！ 良いんですか？！！）」

「（お前ら！ ……あいつらはこれから地獄に行くんだ、このくらいの事はさせておけ！！）」

そして作戦が始まった。

『諸君ら、勇敢な戦士たちは……誰も経験したことがない戦いへ向かう！ しかし、人類にはこのくらいの事しかできないのだ！！』

……諸君らの健闘を祈る』

地球軍の本部から激励の言葉が入るが……R乗りは誰一人、感動しなかった。むしろ嫌悪した……若い俺たちがなぜ、バイドに侵される危険がある戦場に行くのに、お偉いさんが安全地帯でぬくぬくしているのだと。

『R大隊発進準備！！……第一、第二カタパルト解放——くそつたれが！！　お客さんがお出ました！！　距離、八百。総員第一次戦闘配備！！　弾幕厚くしろ！！』

「……さっそくかよ、ついてねえぜ」

「そつばやくな、リカルド、これが終われば浴びるように酒を飲もうぜ」

「おいおい、パーシー、死亡フラグ立てんじゃねえよ」

「ちげえねえ！！」

「んだとお！　いいぜ、俺が親玉を倒してやるよ！！」

戦闘が始まったようだ……R乗り達は談笑をしていた、戦闘開始とは思えない雰囲気だったが、しかし悪い雰囲気ではない。エンとリナはヘルメットをかぶり、いち早くRに乗る、そして徐々に乗っていくR乗り達。

「みんな聞いてくれ……」

そこでエンが口を開いた……よく聞いてみると声が震えていた。それを笑う者はいない、バイドに負ける……それは宇宙空間に投げ出されるだけでなく、ヘタをすればバイドに侵食され、人間ではない者に変容された挙句、同胞と戦う危険性もあるのだ。怖くない筈がない。

「俺たちはくそつたれた戦場に向かう……生きて帰れる保証はどこにもない。だが……俺とリナ、お前たちならバイド共に一泡吹かせれるはずだ」

誰もがエンの言葉に耳を傾けた、ここにいる者はエンと同期か後輩である……信頼関係は最高である。

「いや一泡じゃねえな……ぶっ潰しに行こうぜ!!」

「さすが隊長!!」

「愛してるぜ、ベイビー!!」

「ヨッシャアアアアアア!! 行こうか!!」

歓声がエンの耳に入る……通信から聞こえたが、エンの心から何かを取り払われる感覚が起こった。ゆっくりと通信を切り、リニアシートに全身をうずめる……耐G性能のシートだが今は心地が良かった。

「大丈夫だよ……エンならできる」

「ああ、行こうか!!」

『ライザス少佐とアークライト大尉、地獄への切符は買ったか？』

途中下車はできねえぞ!!』

「艦長……覚悟はできてます」

「エンとならどこまでも」

『なら行つて来い!!』

すでにエン以外のRは発進した、今はカタパルトから宇宙^そを見る。光があちこちで輝いたり消えたりしている、むろん、それらは全て爆発だが……エンはそれが綺麗に見えた。

「（こんな戦い……早く終わらそう、このR-9Aで!!）」
『1、2、3……発進どうぞ!!』

「R-9A……アロー・ヘッドプロトタイプ、出るぞ!!」

アロザロヘタイプ
R-9APが飛び立つ……そして目の前には巨大なスペースコロニーがあつた。

「……来るよ、エン!!」

「来いよ……どんな敵でも撃ち抜く!!」

一方、コロニー内部の最奥部……異相次元の入り口だが、そこには巨大な生物が尻尾を振りながら存在していた。

「GYOOOOOOOOOOOOOOOOOO!!」

——A級バイド、ドブレラドプス

始まりの矢、A級バイド（後書き）

作「次回予告!!」

ついにスペースコロニーに突入する始まりの矢、次々と現れる相手を撃ち抜きながら進んで行くと……異相次元の入り口には巨大な生物が

次回『波動砲発射』

作「次回もちえりお!!」

追記、R-9の波動砲について

元々は2ループチャージの波動砲だったんですが……第一次バイドミッションでは間に合わず、1ループだったんです。2ループになったのは『Last Dance』の時です。

ぶっちゃけると2ループ機体もあったのでは？ という作者の創造からできました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6294x/>

R-TYPE Rの系譜

2011年11月11日15時49分発行